

73 理療教育における支援データの分析 ～困難事例からの考察～

自立支援局 理療教育・就労支援部理療教育課 加藤 麦 池田 和久 漆畑 和美

【はじめに】

理療教育課では25年度より運営方針業務として「標準的なサービスの体系化に向けたデータの整理」を掲げ、利用者に対する支援を数量化することで支援データの集積を行ってきた。今回は26年度の支援データの集積結果の概要と理療教育における訓練に困難を抱えている利用者に対する支援の特徴について集積データからの分析を試みたので報告する。

【支援データの集積】

理療教育に在籍する全利用者を対象に、補習、相談支援など教官が行った利用者への支援について利用者ごとに件数、時間、支援方法、内容等を記録した。記録の方法は理療教育課のサーバにクラスごとのエクセルファイルを置き、支援を実施した教官がその都度入力した。

【集積結果の概要】

補習は総時間1,132時間、利用者1人当たり13.8時間であり、学年別の1人当たり時間では中間学年(2・4年)が15.7時間で最も多かった。相談支援は総件数726件、総時間366.0時間であった。学年別の1人当たりの件数と時間は、ともに受験学年(3・5年)が最も多かった(13.0件、6.2時間)。相談支援の対応方法は対面が最も多く(59.5%)、相談内容では学習が最も多かった。学年別の相談内容ではいずれの学年も学習が最も多かったが、2番目に多いものとして初学年(1年)と受験学年では生活一般であったが、中間学年では健康であった。

【困難事例の分析】

理療教育の全利用者を年度途中契約解除群(9名)、年度末契約解除群(4名)、原級留置群(11名)、再評価進級群(8名)、欠点あり進級群(23名)、欠点なし進級群(27名)の6群に分け、支援データの分析を試みた。1人当たりの補習時間は年度途中契約解除群以外ほぼ同様の時間となっており、補習による点数の上昇や単位修得率の向上は認められなかった。1人当たりの相談支援件数は再評価進級群が最も多く、年度末契約解除群で最も少なかった。1人当たりの相談支援時間は原級留置群が最も多く、年度末契約解除群で最も少なかった。原級留置群は補習時間が少ない反面、相談支援の件数や時間が多く、個別支援に重点が置かれていることが示唆された。また年度途中契約解除群は1件当たりの支援が長時間に及んでいることが明らかになった。一方、年度末契約解除群では他の群に比べ支援件数・時間ともに少なく、利用者からの要望による相談支援が少ない傾向を反映している可能性がある。

【おわりに】

利用者に対する教官の支援を記録して数量化し、支援の実態を視覚化することに一定の効果を上げたものと考えられる。しかし、集積したデータを十分活用できているとは言えず、分析に適したデータ項目と記録方法の見直しが今後の課題である。